

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
<http://www.yumuyu.com/>
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2021年(令和3年)3月16日 火曜日

無料

第106号

毎月発行

発行 2021年(令和3年)3月16日 火曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、67歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて4作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。



消えかける震災の記憶を写真で思い出す
巨額の復興プロジェクトは巨大な防潮堤と
売れ残ったかさ上げ土地を残しただけか？
他方、被災地からの人口流出は止まらず、
被災者復興は置き去りのまま。いったい誰の
ための、何のための10年だったのだろうか？



2012・6月石巻取材一垂幕



2012・6月石巻取材一臨時の共同浴場



2012・6月石巻取材一復興マルシェ



2012・6月石巻取材一がれきの山



2012・6月石巻取材一家屋撤去



2012・9月岩手沿岸部取材一祭りに集う山田町



2012・9月岩手沿岸部取材一津波の後の団地



2012・9月岩手沿岸部取材一鶺鴒住居



2012・9月岩手沿岸部取材一がれきの山



2012・9月岩手沿岸部取材一復興ボランティア



2012・10月牡鹿半島取材—お地蔵さん



2012・10月牡鹿半島取材—コンテナ



2012・10月牡鹿半島取材—復興の鐘



2013・3月石巻取材—再開した石ノ森萬画館



2013・3月石巻取材—アニメ電車



2013・3月石巻取材—石ノ森萬画館イベント



2014・3月関上取材—見渡す限り被災地



2014・3月関上取材—被災した寺



2014・3月関上取材—基礎だけ残った



2014・10月奥松島取材—7.2m 防潮堤計画



2014・3月仙台空港近隣取材—復旧した空港



2014・3月仙台空港近隣取材—倒壊した墓



2015・8月福島取材—除染看板



2015・8月福島取材—放置された倒壊家屋



2013・7月福島取材—無人のまちに信号機



2015・8月福島取材—汚染土の土嚢



2013・7月福島取材—無人となった菓子工房



第79回

水産業再興のための
料理レシピ紹介

《牡蠣の 醤油バター焼き》

匂が牡蠣の匂。片栗粉の
プリッと感があります

（松本談）



郷土料理愛好家
松本由美子氏

—材料— 2人分 牡蠣 200g、片栗粉 大1、オリーブ油 適量、にんにく 1かけら、
バター 8g、醤油 大2/3、青味野菜 少々

—料理方法— ① 牡蠣は塩少々を入れ、水で洗います。② キッチンタオルの間に挟み水分を拭きとります。③ 牡蠣に片栗粉を大1をサラッとまぶします。④ オリーブ油をフライパンに敷き、ニンニク1かけらを焼き香りをつけます。⑤ そこへ、バターを落とし片栗粉でまぶした牡蠣をいれて焼きます。⑥ 両面に焼き色がついたら、醤油をふりかける。⑦ プリッと焼き色のついた牡蠣を盛りつけて完成。

次回開催未定状態のまま延期してちょうど1年となりました。なかには「家飲み」で東北地酒を味わっている方もおられるようです。みんなの顔が目には浮かびます。早くみなさんに会いたいですね！そして美味しい東北地酒への恋しさが狂おしいほどに募っておりますが、それまでは以前の写真画像のみで何とか耐えてください。再びお会いできる日を楽しみに！





写真でお伝えする
東北の風景

新型コロナ禍
自粛症候群薬
「10年目の田老」

写真撮影
尾崎匠



10回目の 三・一一

あれから一〇年は「区切りの一〇年」なのか？

二〇一一年三月一日に東北地方太平洋沖地震が発生してから一〇年となった。早いものである。あれから一〇年という事で、今年ハズメディア等で震災関連の話題が取り上げられることが、昨年などよりも多い印象がある。それはそれで、震災のことを振り返り、そこから得た教訓を忘れないために有意義であると思ふ。

ただ、よく聞く「節目の一〇年」という言葉、この地においての災害で大変な思いをした人の口からはほとんど出ていないように思う。大切な人を失ったり、大切な故郷を心ならずも離れたり、あの震災で大変な思いをした人にとって、一〇年で数字としてキリがいいからそれで節目だと思うとか、そういうことは少ないのである。

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブローグ」
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

はないか。何年経ったって、悲しいものは悲しいし、辛いことは辛い、悔しいことは悔しいのである。

一方、復興、それもハード面については、明らかに一〇年を目前として進められてきた。復興道路、復興支援道路は今年中に完成するし、仮設住宅も今年中に全てなくなる見通しである。ハード面の整備が一段落した後も、ソフト面、被災地の心のケアなどの予算は残るようで、それは一〇年で完了するハードとは違って理にかなったことである。

区役所に飾られた弟の写真

私は今年も、弟の最期の地、仙台市若林区荒浜に出掛けた。三月一日のこの日は、午後仕事をして荒浜に向かう。震災の翌年からずっとそうである。出発の地は今年も弟が勤務していた若林区役所である。区役所には今年も献花

場が設けられていた。一階にある献花場で献花をするのも毎年のことである。そうしたら、区役所の入口で、たまたま両親と顔を合わせた。両親も毎年荒浜に足を運ぶので、こちらで会うことは多いが、ここで会うのは初めてのことである。

初めて知ったのだが、一階の献花場とは別に、四階にはあの日公務中に亡くなった弟ともう一人の職員のための献花場が設けられているのだという。いや、そういうことはもっと早く教えてほしい。そのようなわけで、両親に案内してもらって初めてそちらの方にも献花した。弟の写真も飾られていた。

モニターには父親が寄贈した震災当時の写真がスクリーン形式で映し出されていた。「記憶を永く伝えるために」と書かれたリーフレットも作成してくれていた。ありがたいことである。

浄土寺で感じたこと

今年も、区役所を出て、あの避難の呼び掛けに広報車で出掛けていった弟が通ったであろう道を通って荒浜に向かった。毎年このことだが、今年も海が近づくと、風は強く、冷たい。それでも、地震の後雪まで降り出した一〇年前のあの日に比べればはるかにましである。

あの日津波を遮った仙台東部道路の近くに、津波で

流された荒浜地区唯一のお寺、浄土寺が移転した。毎年この日に浄土寺では荒浜で亡くなった人のための慰霊法要が営まれるが、それはかつてお寺があった場所でも営まれていた。昨年、荒浜地区で亡くなった人の名前が書かれた慰霊碑が新寺院の敷地に移され、今年からはそちらで慰霊法要が行われることになった。ここでまた両親と合流。もちろん、私も両親もこのお寺の檀家ではないが、慰霊碑には弟の名前も刻んでいただいている。その縁で毎年荒浜地区の方々と一緒に参加させていただいている。

途中、慰霊碑に刻まれた一人ひとりの名前を読み上げて追善菩提を祈る場面があったが、そこでなんと多くの人がこの地で命を失ったのかまざまざと実感する。ここで名前を読み上げられている人全てが、あの日突然、自分の人生に強制的に幕を下ろされたのである。ここ荒浜で亡くなった人の数は一九二人。東日本大震災全体ではおよそその一〇〇倍の死者・行方不明者数である。改めてこの震災が奪った命の大きさに思い至る。

浄土寺のご住職は何とこの三月一日が誕生日だそう。今年で七二歳とのことだが、八〇までは長生きして、毎年この日には慰霊法要をやるので、またぜひおいでいただきたい、近くに来たらこの慰霊碑にも手を

を合わせてほしい、とのことだった。何度か口にしてきた「一日一生」という言葉がとても印象に残った。一日を一生のつもりで生きよ、ということなのだろう。明日が当たり前のように来ると思ってはいけない。事実、震災で亡くなった人々には明日は来なかったのだから。

三月一日の荒浜

慰霊法要の後、両親と別れて私は荒浜の海岸を目指した。この地を襲った大津波が仙台東部道路で堰き止められたことから、荒浜のより近くを通る県道もかさ上げされて堤防の代わりとし、多重防御の一翼を担うことになった。その高さは六メートル。ただ、この県道のすぐ近くにある、現在震災遺構として公開されている荒浜小学校を襲った津波の高さは一〇メートル。あの日と同じ高さの津波が来たらここを通っている車は津波に巻き込まれてしまう。

津波を伴う地震が発生した場合にすぐこの道路を下りて内陸側に避難することが必要である。その荒浜小学校では、H o p e f o r p r o j e c t が今年も花の種の入った風船を配っていた。もらった風船の写真を撮っていたら、リリースが遅れてしまった。慌ててリリースしたが、一つだけ遅れて飛んで行った。どこに落ちて花を咲かせるのだろうか。

海岸には荒浜慈聖観音が立っていて、そちらで手を合わせる人も多くいる。手を合わせている人一人ひとりがきつと大事な誰かを失っているのだろう。

震災前より高くなった防潮堤に上って、今年も海を眺めた。風が強くて時々白波は立っているが、穏やかな海である。あの日、この防潮堤を易々と越えていった津波を想像するのは難しい。

昨年来た時には建設途中だった、荒浜小学校の南側の「避難の丘」は完成していた。仙台の沿岸地域の中で最大規模を誇る避難の丘で、いざという時には五〇〇〇人余りが避難できるといふ。荒浜地区は震災後、災害危険区域に指定されたため、人は住めなくなってきたが、その跡地の利活用で、観光農園などが集まる施設ができる予定となっているので、その想定される最大の人数が避難できるよう、避難の丘や避難タワーなどが整備された。

この地を大津波が襲ったのは一四時四六分の地震発生から一時間ちよつと経過した一五時五四分。私にとっては、弟が区役所においてまだ生きていた地震発生時刻より、弟がこの地で命を失った一五時五四分の方が重要な時刻である。この時刻には、弟の遺体が発見された地区内の南長沼に行つて手を合わせる。水鳥の群れが水面をすいすい泳いで

「三・一一」不忘の碑

来た道に戻って再び区役所へ。あの日、弟が通ることができなかった道である。自転車で乗りながら、あの日あの場所にこの自転車があればな、などとも思う。海上を進む津波は時速数百キロというトンでもないスピードだが、陸地では時速三〇〇キロ程度にまで速度が落ちる。私が乗っている自転車はペダルを踏む脚にちよつと多く力を込めれば時速三〇〇キロはあまり苦もなく出る。一旦渋滞に巻き込まれると身動きが取れなくなる車より、自転車の方が避難に有効なのではないか、というのはあの日以来ずっと思っていることである。そのようなことを思いながら、あの日戻つてこれなかつた弟に代わつて区役所に戻り、昨年有志の方々が建ててくれた「三・一一不忘(わすれじ)の碑」に手を合わせた。

家に帰る途中にホールケーキを買った。あの日から一〇年生きてこられたことのお祝いの意味を込めて。ただ、プレートに何か書いてもらおうのはちよつと気が引けたので、一と〇のキャンドルだけ購入した。

あれから一〇年が経つて

「節目の一〇年」報道では、一〇年間の復興のあり方

の検証も多くあり、様々な課題が指摘されていた。それはそうだろう。未曾有の災害に直面して、お手本もない中でやってきた結果が一〇〇パーセント完璧なものになるはずもない。それはそれで今後に活かしていくことが必要だが、一方で震災後にできた新しい人と人とのつながり、様々な思いに基づいた新たな取り組み、そうしたものがもたらしたものの価値は間違いなく存在している。そうしたものにもしっかり目を向けていきたい。

私の好きなビールを例に挙げれば、東北の地ビール醸造所をつくる「東北魂ビールプロジェクト」がある。一〇年前、震災で全国からいただいた支援への恩返しに、品質の高いビールで恩返ししよう、そのために品質を高めようということプロジェクトは立ち上がった。そして、お互いの経験知や技術を出し合つて、一緒に美味しいビールを造つている。いわばライバル同士がそれぞれの「企業秘密」をオープンにして一緒にビールを造るなど、普通あまり考えられないことだが、



震災を機にそれが続いているのである。毎年どこかの醸造所に参加する醸造所皆が集まって一緒に独創的なビールを醸造していたが、今年はこの新型コロナ禍で集まることができなかったために、「地域のお米とホップを使用したビールを提供すること」を条件として、今回参加した東北の一の醸造所がそれぞれ特別なビールを醸造することになった。その結果、今回参加した一の醸造所それぞれが力を入れたビールを造ってくれた。これらのビールは仮に震災がなかったとしたらこの世には存在しなかつたビールである。

震災からこの方、日本中、世界中から様々な支援をいただいた。そのお蔭で一〇年経つた今もこうして生きていられる。一〇回目の三・一一は、まずは何よりもそのことに感謝する日としたい。

シリーズ 遠野の自然

「遠野の啓蟄」

遠野 1000 景より



雪の日の参道



氷の観音様

三月初めは二十四節季では「啓蟄」である。遠野の二月末までは冬であった。しかし、今回の遠野の写真は、まさに、厳しい冬の季節が終わり、春がそこまで来ていることを告げる経過を辿れるようである。

とはいえ、例年のように、「氷筈」や「しぶき氷」などを見ないと冬が来て、また冬が過ぎていくことを実感できないが、今年は見れてよかった。これですっかりと季節の移動が実感できる。



しぶき氷



しぶき氷



カケス



East-iD



芽出度い



白鳥飛

むしろ『アイヌ語地名の南限線』より南の蝦夷の国の事

「蝦夷の国」といえば、東北である。少なくとも、本誌上ではそう断言しても否定される事はないだろうし、事実インターネット上で検索を掛けてもその認識を逸脱するような記事は見られないように思う。

かつて『日本書紀』に「東の夷の中に日高見国あり」、「古事記」に「東夷のうち、蝦夷が最も手強い」と語られた内容からは、この日高見国がどのような「国」なのか、単なる「郷」の集まりだったのか、それとも国家的な体裁を整えたものだったのかは明らかでなく、国境や民族構成もことごとく不明という有様だ。

「蝦夷の国」を示唆する



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

文献は決して少なくなく、前記にある「東の夷」とは東海・中部・北陸以東を指し、ヤマトタケルの東征という記述でいえば、『古事記』では相模国、『日本書紀』では駿河国に賊、即ち蝦夷がいて、戦いが繰り広げられたという話になっている。しかしながら、現在の静岡県・神奈川県の人が自らの故地を蝦夷の国と呼んで誇る姿というのはピンとこない。無論、関東の人々の、関西・近畿といった西国の人々や歴史的権威に対する反骨は、東国として討伐を受けた過去にも由来するものだろうが、東国の人々にとって「蝦夷」という名称はあくまで東北に向けたものであり、彼らのアイデンティティはむしろずっと後代の坂東武者としての、つまり中世以降の武家政権の時代に立脚するものではないか、と思われるのである。そう考えると、東国と言われた地の人々は蝦夷であったかも知れぬにもかかわらず、その歴史と事績が明確に残っていない事もある、それを誇れない矛盾を内包していると思えるかもしれない。

一方で、蝦夷としての長い抵抗の歴史が知られ、近年徐々に見直されてきただけでなく、平泉藤原氏が構築した奥羽一円の独自政権

このほぼ独立的な準国家ともいうべき行政形態が、明らかにそれ以前の蝦夷としての歴史に深く根ざし、その血脈を強く意識したものであった事が認められるようになった東北は、日本で唯一「蝦夷の国」を堂々と誇る事ができる地域であり、その事こそが東北の多くの人が気づかない、この地の強みであるとも言えるかも知れないと私は考えているのである。

さて最近、そんな東北開連の古代史に纏わる、ある古風なテーマが復活したかのような、度重なる出版が東北史好きを惹きつけた。そのテーマとは、ズバリ「アイヌ語地名」である。東北に、いや下手？をすれば関東はおろか近畿や四国にまでアイヌ語で解釈できる地名が存在するという話をかつて聞いた者からすれば、何だ今更か、という感覚かも知れない。東北における蝦夷の問題と切っても切れない深い関係があるのが、北海道アイヌの存在。蝦夷が見直される、云わば「復権」の動きはアイヌ民族の復権のそれとも常に連動してきたのだが、今回この所謂アイヌ語地名論争に終止符を打たれたが如き書が立て続けに登場したのだ。・とは言っても、その著者はただ一人。四国の漂泊民・サンカの研究で知られる民俗研究家・筒井功が世に問うたその書は『アイヌ

語地名と日本列島人が来た道』(2017)および『アイヌ語地名の南限を探る』(2020)の二冊、内容はほぼ同様と言って良いものである。両書は東北始め日本本土におけるアイヌ語研究の第一人者であった故・山田秀三氏同様の徹底した現地調査主義の下、執筆された。現在のところ、他に対抗論者が見当たらずに最新にして最有力と目されるアイヌ語地名論だが、二点で興味深い展開が見られた。一つは、アイヌ語地名は北陸や中部、関東には全く存在せず、それどころか南東北にすらほとんどなく、宮城県北部から北東北三県にほぼ限られる、という研究成果。二つは、その背景に古代における一定の長い時期に現在の北海道から「アイヌ系種族」の、北東北への移住と南下という所謂民族大移動があったとする主張である。

アイヌ語地名が北東北三県に特に集中している事は研究当初から認識されていた事であったが、アイヌ民族(正確には、後代のアイヌ民族に連なる人々)の東北の南下という視点は比較的新しいものである。江戸・明治以来長く支配的であった、蝦夷IIアイヌ説が戦後覆り、蝦夷II日本人説が主流になって、二十一世紀の今、故・工藤雅樹氏始め広く主張した「どちらとも

民族の成立過程であったとする論調に落ち着いてきたかと思いきや、ここにきてあらためて堂々たる「蝦夷IIアイヌ」宣言の復活か、という様相である。本稿では、未だ決着の着かない東北の「民族問題」、アイデンティティの在り処である基層の正体に迫るべく、アイヌ語地名の「南限線」と蝦夷の謎にフォーカスしてみたい。

両著においてまず私が注目した点は、我が地元でもある日本海側での研究成果である。現在の秋田県・山形県境に当たる鳥海山や背後の山地を境に、長内、毛馬内、笑内など、小川を意味する「ナイ」が付くもの他、アイヌ語に特徴的な地名が不思議な程にぱつたりと消えてしまふ、というのだ。確かに、その通りなのだろう。庄内地方にアイヌ語的地名など、現地人である筆者自身もあまり記憶がない。庄内という地域名自体を「ソ・ナイ(滝・川)急流最上川から」というアイヌ語由来で解釈する研究者もあるが、定説としては平安期から栄えた大庄園・大泉荘をその由来とする説が圧倒的的主流である。それにしても、一体この地域に何があったのだろうか？鳥海山を何らかの目印として、ここより南へは異文化・異民族が踏みこむま

北に、現在の北海道に当たる島からアイヌ系種族が南

にあつたとしても言うのか。更にわからないのは、念珠関(鼠ヶ関)・白河関・勿来関の所謂古代に設けられた奥羽三関の存在である。こちらはよく知られるように山形と新潟の県境、福島と栃木・茨城県境に置かれた、現在の東北という領域をほぼ完全に一般に認識させる大きな指標にもなっているが、両書の主張するアイヌ語地名の南限線よりもこれらは遙かに南に位置する。著者は蝦夷の主体はアイヌ系である、としながらもこの点においては蝦夷と呼べた人々が必ずしもアイヌ系種族だけを指すものでない、はなから「蝦夷II政治的概念」説に譲った形で説明している。

素朴な疑問として、「東の夷の中の最も手強い蝦夷」と言われたのがアイヌ系種族として、彼らはアイヌであったが故に強かったのか、それとも他種族との混交があつて強くなったのか、という事がある。アイヌは所謂「縄文人」と共通する身体的特徴があるとされるが、この縄文人は周知のように東北のみならず関東、中部、北陸、どこから日本列島全土に住んでいたところか、本書では東北に先住民として後の日本語に連なる言語を用いる人々か？鳥海山を何らかの目印として、ここより南へは異文化・異民族が踏みこむま

また、秋田・山形県境より北にはアイヌ系種族が多く住み、南側にはほとんど住んでいなかったという話が真実だとすると、秋田県人と山形県人は遺伝学的にかなり違わなければおかしい事になる。秋田・岩手以北のアイヌ系種族が北海道へ退却したり、朝廷側によって西国諸国へ強制移住させられたりしてほとんどいなくなつたという話ならばわかるが、そういう訳ではなくアイヌ系種族は現地で和人に同化した、としているのだから余計問題である。更なる疑問は、山形県内にも確かに存在するアイヌ語地名を全く無視するよう

「皆無である」と断じる強引さである。山形県内でも何となく有名なものは、広域名である「置賜」であり、これはアイヌ語の「優嗜曇(うきたむ)」が変化したものと思われ、日本書紀に「陸奥国優嗜曇郡の城養の蝦夷」である「脂利古男麻呂」が仏門に入りたいたと願った記録がある。もう一つの例は、現在に残っていないが、確かに存

在した地名である「都岐沙羅」一冊である。これは現在の新潟県中部・北部の柵に続いて朝廷が設置した対蝦夷用の軍事施設である。問題はそれが厳密に置かれた可能性が濃厚にどこなのかというよりも、存在した地名が消されている、という点にある。何故、消されたのか。所謂大和語ではない、蝦夷語地名だったからだろうか。その理由は記録になく、全く不明である。

しかしこの一つの地名が消された事実は、おそらくこの例が一つではなく、周辺の地名にも同様の動きがあつたであろうという推測を容易に引き出せよう。つまり、山形県の庄内地方にもアイヌ語地名は数多くあつたが、そのほとんどは大和語地名に置き換わった可能性が高い、という事だ。そしてそういう中であつても後代にまで残った置賜や福島県の庄内山(阿津賀志山)などの数少ないアイヌ語由来と思われる地名は、何か特別な計らいや、働き

ではないか、と思われるのである。例えば、蝦夷たちの何らかの努力によつてモニュメント的に遺された地名である、という仮説も可能ではないだろうか。

蝦夷IIアイヌ説は今、俄かに息を吹き返し、またも私たちの内に燃えるイメージを塗り替えようとしているのかも知れない。しかし、かの阿弭流為始めとする奥羽の蝦夷が馬と鉄を駆使し、騎射を得意としてその技術が後に坂東武者に伝わったなどの話を思い出すと、その特徴が北海道のアイヌに全く継承されなかつた事が不思議で、やはり単純な図式には、蝦夷は嵌まつてくれな

東北における蝦夷の謎は、尽きる事がないどころか、研究が重ねられる毎にますます深まるばかりのようにすら思える。私もまた、「アイヌ語地名の南限線」のすぐ南に生まれた蝦夷の一人として、この謎に生涯向き合っていきたいのである。



『アイヌ語地名と日本列島人が来た道』2017年

中央集権的な国のコロナ対策に対抗する全国の知事たち 知事たちは道州制に代わる新たな地方自治を目指そうというのであろうか？ 混迷だけが目立つこの国の今後希望が持てるのは知事しかないのだろうか？

新型コロナウイルス禍に対する有効な施策が一年経つてもなかなか見いだせない状況下、原則として不要不急の外出を控える、会社には行かずにテレワークで対応しろ、夜の飲酒は厳禁だ、昼でも不要不急の用事がなければ出歩くなというような「自粛」ばかり求められて、多くの国民の不満がくすぶっているのは周知のことである。経済に与える影響も大きく、飲食業や観光業は特に痛手が大きい。

今は、国の支援制度で何とか食いつないでいるが、この春すぎから、いよいよ会社存続に赤信号が点灯する企業が续出するだろう。そうしたなか、このところ、政府の新型コロナウイルス対策に関して、全国知事会や個々の知事たちから、不満や反対が表明されたり、あるいは政府とは異なる施策が打ち出されたりするケースが続出している。

一番の話題となったのは、島根県知事の東京オリンピック聖火リレーの中止検討表明であった。

大会前イベントに過ぎないリレーに七千二百万円の県予算をつぎ込むより新型コロナウイルス対策に全力を尽くすべきではないかとの正論に賛意の声が多数寄せられた。さらに、この意見表明に対し、島根選出の国会議員が高飛車な発言をして、さらに火に油を注ぐ結果となった。

政府は全国一律の施策を

全国知事会（会長・飯泉嘉門徳島県知事）

2月27日、新型コロナウイルス対策についてテレビ会議を開き、政府への提言をまとめた。政府が関西・東海・福岡の6府県を対象に緊急事態宣言を今月末で解除すると決めたことに関し、解除後の感染再拡大を防ぐため、モニタリングのためのPCR検査の支援などを要請。人の移動が増える年度末や年度初めの時期の対策も検討するよう求めた。ワクチン接種をめぐるでは、いつまでに国民の何割に対して接種を目指すのかを明示するよう主張。自治体への財政支援なども働き掛けた。

押し付けようとするし、他方、各県は県民により近いこともあり、県の実情に合わせた施策を採用しようとして、施策や方針が一致しない。

政府も思い切って「各県の自主性」を認めればいいものを、相変わらずの全国一律の方針を変えようとないうように見える。しかし、もう限界であろう。

それぞれの権限と責任範囲を明確にして、県に任せるときは任せ、国のすべきことの輪郭を明確にする時期が到来している。

* 話は変わるが、最近、入省したばかりの若手官僚がほとんど辞めているという。いまの硬直した官僚制度に

嫌気がさしたためだろうか。それと、中堅どころの官僚が知事選挙に出てくる現象もよく目にするようになった。

国会議員を目指すより知事の方がしがらみが少なく、思う存分働けるということなのだろうか。

そうであれば、地方自治はますます強化されていくことで喜ばしいことだ。

筆者としては、いつの間にか立ち消えとなった「道州制」が別の形をとって出現するのかが秘かに期待を寄せている。

そして、先進国の中でも珍しい、何でも中央で決めるというやり方を大きく変えて欲しいと願っている。

茨城県知事・大井川和彦氏

茨城県は2月22日、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う県独自の緊急事態宣言について、23日付で解除すると発表した。先月18日に発令し、28日まで延長していたが、新規の陽性者数や入院患者数が基準を下回り、市中感染の可能性が低いとして、前倒しで解除した。県全域に出されていた不要不急の外出自粛要請や飲食店への時短営業の要請が終了する。大井川和彦知事は「経済への大きな影響を考慮した」と説明。

岡山県知事・伊原木隆太氏

2月27日、新型コロナウイルス対策に関し、地域によって政府からの支援差が大きいとして疑問を呈した。「(感染対策を)頑張れば頑張るほど支援が少なくなるのでは切ない。地域によって差が大きすぎるのではないか」と指摘した。「事業者からすれば死活問題だ。」とも発言。

島根県知事・丸山達也氏

知事は2月17日、政府や東京都の新型コロナへの対策に不満を訴え、5月に県内14市町村を通る聖火リレーの中止検討を表明。大会前イベントに過ぎないリレーに7200万円の県予算をつぎ込むよりも新型コロナウイルス対策に全力を尽くすべきではないかと。また、政府や東京都の新型コロナウイルス感染症への対応について「今のところ改善の兆しはない」として、解決に向け関係省庁や地元選出の国会議員に要望書を提出する考えを示した。

和歌山県知事・仁坂吉伸氏

昨年5月、「国には感染症対策の専門家がいるはずなのに、専門知識のない政治家でも考えつきそうな自粛ばかりが報じられている」と指摘。ただひたすら自粛の協力を仰ぐばかりの政府や大都市に、「私も思わずうらみ節をいいたくなるのです」と不満をもらした。投稿の最後には「行政当局が行うべき感染症対策の面で成功させ、それを補完するものとして住民に自粛の不自由さを耐えしのももらえるのではないかと説いた。国民の自粛と政府の適切な対策が両輪となるべきと述べた。